

生後 8 ヶ月児の視線方向の知覚が、顔認識と同じく、全体的な処理であることを報告
—乳児における視線方向の処理過程の発達—

山口真美教授（計画班員），大塚由美子研究員（日本女子大学・日本学術振興会：論文の
Corresponding Author），仲渡江美研究員（中央大学：現在は生理学研究所）らから，乳児
が視線方向を知覚するときには，顔認識と同じく，目や顔の輪郭の方向も含め全体的に処
理していることを *Infant Behavior and Development* 誌に発表しました．

Perception of Illusory shift of eye gaze direction by infants.

Nakato, E., Otsuka, Y., Konuma, H., Kanazawa, S., Yamaguchi, M.K., & Tomonaga, M.
(in press). *Infant Behavior and Development*.

他者の視線を知覚することは，社会的コミュニケーションを行う上で重要なスキルの一つです．生後すぐの新生児でも，視線が逸れた顔よりも，直視している顔の方を長く見ることが最近の研究から示されています．

図 1 は Wollaston(1824)の錯視図です．図の中の顔に注目すると，左右の顔の視線は別々の方向に知覚されます ((a)：視線の逸れた顔，(b)：視線の真っ直ぐな顔)．しかしながら，目の部分だけに注目すると，(a)，(b)とも，同じ視線方向（逸れた視線）に知覚されます．この Wollaston の錯視図を用いることで，視線知覚が，目そのもので部分的に処理されているのか，あるいは目や他の顔特徴を含めて全体的に処理されているのかという問題を直接的に調べることが可能です．

そこで，本研究では，この Wollaston の錯視図を用いて，生後 6-8 ヶ月児の視線方向の知覚の処理過程を調べました．

実験を行ったところ，8 ヶ月児のみ，目や顔の輪郭方向との関連に基づいて視線方向を全体的に処理していることが示されました．つまり，図 1 の(b)のように，目そのものは逸れているにも関わらず，顔の輪郭や鼻などの他の顔特徴を含めて，視線が真っ直ぐなこちらを見ている顔の方を長く注視することが示されました．この結果から，生後 8 ヶ月になると，成人と同じく，目や顔の輪郭方向を含め視線方向を全体的に処理することが可能で，視線方向の知覚の発達過程が明らかになりました．従来の乳児の視線知覚の研究で明らかにされてこなかった乳児の視線方向の処理過程について，行動的指標を用いて直接的に検討した初めての研究になります．

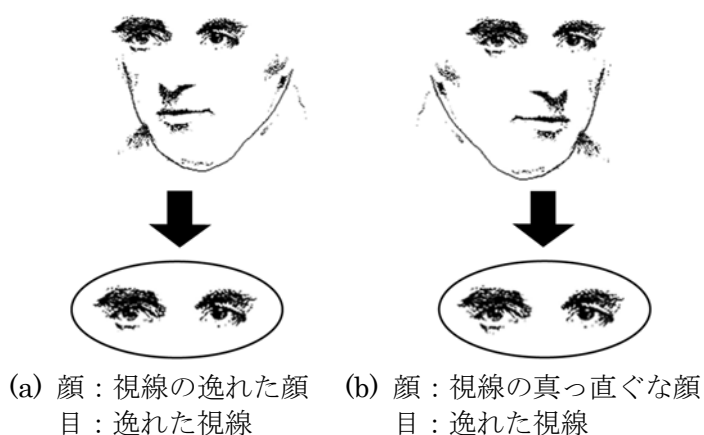


図 1．実験で用いた Wollaston の錯視図